大阪公立大学 Osaka Metropolitan University 学術情報リポジトリ

ドイツ啓蒙主義における女性博士と知のあり方(二〇〇一年度第三回コロキウム)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 弓削, 尚子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004954

ドイツ啓蒙主義における女性博士と知のあり方

弓削　尚子

序

「啓蒙の世紀」とよばれる18世紀、無知、蒙昧なものに光をあてるというその思潮は、教育に対する強い関心を惹起し、「教育の世紀」ともいわれる。

本稿で取り上げるのは、1754年と、そのおよそ30年後の1787年に、それぞれ博士号を「例外的に」取得した２人の女性である。１人は、ハレ大学で医学博士号をとったドロテーア・エアクスレーベン（1715－1762)、もう１人は、ゲッティンゲン大学で哲学博士号を授与されたドロテーア・シュレーツァー（1770－1825）である。

奇しくも名前を同じくするこの２人の女性が、「例外的に」せよ博士号を取得できたのは、啓蒙主義の思潮に負っている。無知、無学な状態から脱却し、光を求めようとする姿勢は、彼女たち自身にも、彼女たちをめぐる人々にも輝かしい啓蒙の理念として受け止められた。しかし、彼女たちの存在が「例外的な」現象にとどまり、第３、第４のドロテーアが輩出されなかったのも、まさに啓蒙主義にその理由を負っていた。科学／学問への扉は、知の世俗化とともに広く開かれるようになったが、18世紀後半になるとしだいに女性に対して閉ざされてゆく。ジェンダーの衣をまとわず中立的にみえた啓蒙主義の理念が、人間の理性や知性に男女の差異をみるようになり、その上にジェンダーの価値を付与していった。こうした《啓蒙主義のジェンダー化》の様相を、ドロテーア・エアクスレーベンとドロテーア・シュレーツァーという２つの観測定点を設けて考えてみたい。

１．「啓蒙の世紀」における知への女性のアクセス

18世紀における知のシステムは、現在とは異なっていた。大学が知の中枢的な制度であったわけではなく、むしろ、17世紀末からロンドン、パリ、

ベルリンで次々に設立された科学アカデミーが、知の近代化の先陣をきった。ただし、ドイツの場合、中世以来の伝統的な大学とは異なる新しいタイプの大学が現れ、1694年に設立されたハレ大学、1737年に設立されたゲッティンゲン大学などは、もはや神学部中心ではなく、「聖俗革命」の揺籃の中で、教育と研究を担う自由な知の営みを推し進めた。

アカデミーのほかにも、各種協会や読書クラブ、サロンなどがそれぞれ知の普及と洗練の一翼を担った。また、出版活動が急激に伸張し、論壇が形成され、さまざまなバックグラウンドの知識人を巻き込みながら、「啓蒙の世紀」という一時代が画されつつあった。

このような時代に、女性たちはどのように知へアクセスすることができたのか。ジェンダーの視点から近世、近代の科学史に迫るベアーテ・ツェランスキー[1]による5つの類型を参考に考えてみたい。

第1は、職人モデルというもの。昆虫学者で画家のマリア・シビラ・メーリアン（1647－1717）[2]や天文学者のマリア・ヴィンケルマン（1670－1720）のように、父親や夫などから教えを受け、彼らに支えられて学問に携わったケースである。女性たちは職人が親方から学ぶツンフトに似た構造の中で、家族や親族から知識と技術を獲得し、彼らの有能な助手となり、あるいは自立した「女学者」として才能を開花させた。本稿で扱うドイツ最初の女性医師、ドロテーア・エアクスレーベンは、このモデルに入る。

第2のモデルは、サロンやアカデミーの隆盛に直接、間接に寄与した上層貴族の女性たちである。ヴォルテールを支えたエミリ・ドゥ・シャトレ侯爵夫人（1706－1749）、あるいはヴァイマルのアンナ・アマーリア公妃（1739－1807）など、パトロンとして、また知的サークルの主宰者として、当時のアクチュアルな学問に接していた。

こうした貴族エリートの女性たちに対して、市民層出身の女性たちにチャンスが皆無だったわけではない。第3のモデルは、ドイツやイタリアの市民にみられ、ラテン語、ギリシア語を身につけ、古典文学に造詣の深い少女たちが「神童」として名を馳せるケースである。ツェランスキーが名付けるところの「ルネッサンス－人文主義モデル」である。しかし、神童の名声が短命であるように、概してこのモデルの女性たちは、学術的な営

みを長く続けることはない。最後には結婚か修道院かという決断を下す場合がほとんどであった。大学教授の父親をもち、彼の教育プログラムに則って博士号を取得したドロテーア・シュレーツァーは、これに分類される。

第4のモデルは、科学／学問の成果の受け手とみなされた女性たちである。当時の学術書には、女性読者に向けて書かれ、あるいは、女性の「生徒」を仮定して、男性教師がわかりやすく講義するという体裁をとったものが少なくない。科学実験を扱ったB.d.フォントネル（1657－1757）の著作は、その代表的なものである。当時、女性の読者は、学問の民衆化の尺度とみなされた。彼女たちの理解力が一般的なレベルを表し、彼女たちの理解を得られれば、その著作は広く理解してもらえるというわけである。教える男性と教えられる女性、啓蒙する男性と啓蒙される女性というジェンダーの図式がここには明確にあらわれているが、こうした第4の啓蒙主義モデルの女性たちが、受動的立場でこそあれ、知をめぐる文化の消費者として重視されたことは注目される。

一方、第5のモデルは、単なる読者にとどまらない。彼女たちは、学び、習得したことを自ら伝えていく役割を担った。翻訳から教科書執筆まで、「学問的知識を仲立ちする女性」という新しいモデルである。ミラノのマリア・アーネシー（1718－1799）は、極限算法に関する最初の包括的な教科書をものし、シャトレ夫人は、『物理学教程』を著し、ニュートンの『プリンキピア』を翻訳した。ツェランスキーによると、このモデルは長期にわたって成功した例だという。しかし、このモデルの女性たちが、常に自分の名前を名乗るわけではなく、匿名であったり、父親や夫、友人の名前で発表するなど、公的な領域で彼女たちの姿を確認することは難しい。

以上、5つのモデルをみてみると、女性たちが学問にアクセスする可能性は、その社会的立場や、教師か友人となる男性知識人たちの支えに負っていたことは否めない。他方、まだ近代における科学／学問の制度化が未成熟ゆえに、さまざまな形で活躍する知的な女性たちの姿がみられた。こうした女性たちの中で、なぜ本稿では女性博士に着目するのか。

博士号というのは、大学という公的な知の制度によってその学識を社会的に権威づけ、明確な形でマーキングするものである。女性の博士号の意

味は、誰によってもどの地域においても、女性の知性を認め、女性が科学／学問に携わることの可能性を示唆するものである。逆にいえば、その公的権威＝権力によって承認された女性の博士号を考察することで、女性の知に対する社会の認識、時代の要請がみえてくるはずである。

2．2人の女性博士

(1) ドロテーア・エアクスレーベン (Dorothea Erxleben)

ドイツにおける初の女性医学博士については、伝記小説が数種書かれ、その肖像画は、60ペニヒ切手のモデルに用いられるなど広く知られている。[3] ドロテーア・エアクスレーベン（旧姓レポーリン）は、1715年、クヴェトリンブルクというハルツ山脈のふもとにある町に生まれた。父親クリスチャン・ポリカープ・レポーリン（1689－1747）は、町医者であったが、医学教育の改善に関する提言など教育問題に関心を示す啓蒙知識人でもあった。長女ドロテーアは、幼少期から病弱で、ベッドに横たわりながら読書にふけるという生活をすごした。父親がドロテーアの兄弟たちにラテン語を教え始めると、彼女も関心を示し、一緒に学ぶようになる。ラテン語習得は、医学はもとより科学／学問全体に不可欠な条件であり、この条件を満たしたドロテーアに、父親はさらなる可能性をみ、小さな町で望みうる最高の家庭教師をつけた。と同時に、補佐的役割を与え、診察に立ち合わせるなど彼女を医学の世界へ導いていった。

1732年5月、イタリアのボローニャ大学でラウラ・バッシー（1711－1778）が博士号を取得した。ドロテーアより4歳年上のバッシーの快挙は、驚くほど早くクヴェトリンブルクに伝えられている。翌月には、ドロテーアのラテン語教師が彼女もバッシーと同じように学問の世界で名声を得るよう励ます手紙を書いている。[4] ドロテーアの能力を高く評価していた父親も、この知らせを聞いて娘が「ドイツのラウラ・バッシー」となることを望んだ。彼女が博士号をとり、医師となる夢を描いたのである。父の夢はまた娘の夢でもあった。1740年、クヴェトリンブルクを統治するプロイセンに新しく王が即位すると、ドロテーア自らがペンをとり、兄弟と共にハ

レ大学で医学を学ばせてほしいと嘆願書をだした。父親も、後に啓蒙専制君主として知られることになるフリードリヒⅡ世に、同じ内容の請願を行っている。やがてレポーリン家に王から許可状が届けられることになる。

しかしシュレジア戦争、オーストリア継承戦争が次々と勃発すると、ドロテーアの兄弟にも軍役が課せられ、ドロテーアの学業は棚上げとなった。当時、未婚の若い女性が親元を離れて１人で旅し、また生活することは難しかった。大学は純粋な男性世界であり、学位をとるという大志を抱いたドロテーアとて１人では大学へ行く勇気がなかった。[5]

結局、ドロテーアの博士号取得の夢が叶うのは、1754年、ドロテーア40歳のときであった。その間、彼女は結婚し、４人の子供を出産した。夫は、かつての家庭教師で18歳年上の牧師補ヨハン・クリスチャン・エアクスレーベン（1697－1759）である。彼はドロテーアの旺盛な知的好奇心を理解し、彼女が父親の診療所を手伝うことも自然なことと受け止めていた。彼の最初の妻を看取った医者はドロテーアの父であり、ドロテーアの有能な補佐ぶりを知っていた。ドロテーアには結婚をしないという選択肢は考えられなかっただろう。当時、結婚は、女性にとって社会的庇護を意味し、エアクスレーベンは、彼女にそれを保障するだけでなく、良き理解者でもあった。夫は先妻との間に幼い子供を含めて５人の子供がいた。ドロテーアの結婚生活は、家事奉公人を雇っていたとはいえ、彼の子供たちの世話と診療所の手伝い、さらに自分の出産と育児という目まぐるしい忙しさの中にあったことは想像にかたくない。

結婚して５年後に父親が亡くなると、ドロテーアは患者たちの要望もあって、ひきつづき１人で医療活動を行った。当時の医学は、職人的技術の習得という側面が強く、父から得た知識と技術、そしてドロテーア自身の経験がものをいった。ところが、まもなくしてドロテーアの１人の女性患者が亡くなり、それがクヴェトリンブルクの町に知れ渡ると、地元の医者３名がこの機会を待ちうけていたかのように、ドロテーアを「もぐりの医者」「にせ医者」としてはげしく糾弾した。博士号を取得するか、医療をやめるか、二者択一を迫られ、彼女は学位取得の道を選んだ。自分の長年の医療経験をもとに博士論文を書き、ラテン語による口頭試問を受け、

1754年、ドロテーア・エアクスレーベンは、ドイツ人女性としてはじめて博士号を取得した。[6]フリードリヒⅡ世から許可状をもらって14年、娘の学位を夢見た父親が亡くなって７年の歳月が流れていた。以降、彼女は46歳で没するまで、医師としてのキャリアをまっとうする。

（２）ドロテーア・シュレーツァー（Dorothea Schlözer）

1770年、ハノーファー選定侯領にある大学都市ゲッティンゲンで、２番目の女性博士となるドロテーア・シュレーツァーが生まれた。[7]２人の女性博士の年齢差は、55年、２世代以上の隔たりがあった。啓蒙主義の後期に生を受けたドロテーア・シュレーツァーは、どのような人生を送ったのか。

ドロテーアの父親は、著名な歴史学者であり、絶対君主に対する厳しい政治批判を行ったことでも知られる大学教授アウグスト・ルードヴィヒ・シュレーツァー（1735－1809）である。彼は、娘に幼少期から綿密に練った英才教育を施した。外国語を重視し、ラテン語を含む５ヶ国語以上を学ばせ、さらに、自然誌、植物学、動物学、鉱物学、数学（算数、幾何学）、そして歴史、文学などの基礎教育を行った。その目的は、当時発言力を増していた汎愛学派のJ.B.バゼドウ（1724－1790）が展開する教育論に反駁するためであった。バゼドウは、ルソーの影響を受け、女子には、後の結婚生活のために必要な教育がふさわしく、科学／学問に従事する女性の能力そのものを否定した。父シュレーツァーはこれに対して、実の娘を用いて女子教育の「実験」をし、反証を試みようとしたのである。

父親は机上の学問ばかりでなく、イタリアへ旅行して美術史を学ばせたり、１人でハルツ山脈の鉱山を見学、調査させるなど教育の実践的側面にも気を配った。ドロテーアは、父親の優れた教育的資質を証明するかのように、さまざまな学問分野にふれ、見事に消化していった。ドロテーアが17歳になったとき、もはや「神童」と呼ばれる年齢は過ぎたが、代わって、「女性博士」のタイトルが与えられるチャンスがめぐってきた。1787年、ゲッティンゲン大学創立50周年の記念行事の一環として、哲学部長ミヒャエリスがドロテーアの学位授与を提案したのである。ドロテーアは、６名の試験官を前に、古典、美術史、鉱物学、数学など２時間半に及ぶ口頭試

問に挑んだ。試験官席には、東洋学のJ.D.ミヒャエリス、古典文献学のCh.G.ハイネ、哲学のJ.G.H.フェーダー、歴史学のJ.Ch.ガッテラー、数学のA.G.ケストナーなど、ドイツ啓蒙期に名を残す著名な知識人たちが居並んでいた。これにひるまず、ドロテーアの受け答えは、かつて彼女の家庭教師をつとめたミヒャエリスが予想した通り、満足のいくものであった。

こうして女性博士ドロテーア・シュレーツァーが誕生した。この知らせに人々は、「シュレーツァーはバゼドウを見返してやった」と口々にいった。しかし、女性の学識をめぐる議論において、軍配は本当にシュレーツァーにあげられたのだろうか。

創立記念行事に高い話題性を提供したにもかかわらず、式典に女性博士が登場することは許されなかった。ドロテーアは、式典の様子を外から窓越しに見守るだけだった。その後の彼女の人生も、「学識ある女性」としてキャリアを築いたとは言いがたい。しばらく父親の研究の手伝いや翻訳などをしていたが、1792年にリューベックの富裕な商人マトイス・ロッデ（1755 - 1825）と結婚すると、ドロテーアの学究生活は終った。16歳年上の夫には、死別した先妻との間に３人の子供がいた。ドロテーアは、後に市長まで務める名望家ロッデを支え、自ら３人の子供を産み、「女の定め」を満たす人生を歩んでいく。

しかし、1810年、ナポレオン戦争の打撃を受けて夫の事業が傾くと、ドロテーアは、夫に代わって、翻訳などで一家の生計を支えなければならなくなった。彼女の博士号は、一家を養うに充分な研究職、教育職を用意することはなかった。貧困のうちに、長女と長男が病死し、弱っていた次女も療養生活を必要とした。そのお金を工面し、娘を気候のよい南仏へ連れて行った帰り、ドロテーア自身が健康を害し、アヴィニョンという異郷の地で55歳の生涯を閉じた。

（３）２人を結びつけるもの、分かつもの

「啓蒙の世紀」を生きた２人の女性博士の生涯は、いくつかの共通点をもっている。第１に父親の開明的な教育方針が娘に知へのアクセスを可能にしたこと。第２に、彼女たちに博士号を授与した大学が、ともに啓蒙期

に設立された進歩的な大学であったということ。フランスと異なり、ドイツでは大学が啓蒙主義の展開に重要な役割を果たしたが、とりわけハレ大学とゲッティンゲン大学は、その中心的存在であった。中世以来のギルド的な伝統を払拭していない大学では、女性博士という発想はありえなかっただろう。とはいえ、啓蒙主義の大学においても、彼女たちはあくまで例外であり[8]、彼女たちの学位取得は、社会にセンセーショナルなものとして受け止められた。

では、2人の女性博士を分かつ相違点はなにか。まず、博士号がキャリアのために現実に必要なものだったか否か、ということである。クヴェトリンブルクのドロテーアは、正規に医療活動を行うために学位を必要とし、10代の頃からその大志を抱いていた。他方、ゲッティンゲンのドロテーアにとって、博士号は父親の教育実験の成功を告げる限りで意義あるものだったが、アカデミックなキャリアを何ら保障するものではなかった。また、医学という技術的な分野とリベラル・アーツ的な分野の違いはあるものの、自らの研究をもとに学位論文を執筆するのと2時間半の口頭試問を受けただけでは、学術的性質の評価も異なる。

さらに「学識ある女性」としての自己認識も異なる。ゲッティンゲンのドロテーアは、父の仕事の手伝いや翻訳の他には、自ら紀行文2本を啓蒙雑誌に掲載したにすぎない。それに対して医師のドロテーアは、学位を取得する前に、匿名で女性の学識について世に問う著作を発表している。[9] 1742年にベルリンで出された『女性を学業から遠ざける原因についての基本的な考察』には、女性の学識に対する社会の偏見をひとつひとつ丹念に検討し、たとえば、女性の有閑無為にも非があるとして、「女性に対する女性の啓蒙者」というスタンスも感じられる。ドロテーア・エアクスレーベンは、医師としてだけではなく、「学識ある女性」として社会における自分の役割を考えていたようだ。

2人のこうした違いを、個人的な人格の差異に帰してしまうだけでは短絡的であろう。個人を超えた構造的な歴史の流れに2人をおいてみると、両者を分かつ最大の要因が浮かび上がってくる。それは、18世紀後半から登場する啓蒙主義のジェンダー・イデオロギーである。[10]「自然」によって

定められた女性像が打ち出され、女性の学識はそれにそぐわないものとして否定されていく。このような啓蒙主義の「現実」を次にみていこう。

3．啓蒙主義の「現実」

(1) ルソー・ショックと大転換

ドロテーア・エアクスレーベンが博士号を取得するには、娘の能力を早くから開花させ、彼女の学位取得を夢見た父親レポーリンや、彼女の医療に対する情熱を認め支えた夫エアクスレーベンなど、男性知識人の理解と支援があった。しかし彼らの存在も、医学博士ドロテーア・エアクスレーベン誕生の快挙も、その深層には、女性の学識に肯定的な立場をとる18世紀前半のドイツ啓蒙主義前期の潮流があったことを見落とすことはできない。

「知性に性差なし」とはF.P.ド・ラ・バール（1649－1723）の言である。[11]デカルト派の哲学者で肉体と精神の二分化説を信奉したバールは、女性の知的、精神的劣性の証明不可能性を説き、平等な教育機会を与えれば、この偏見を経験的に反駁できるとした。[12]ドイツにおいても、女性は男性同様、知恵と徳を備えているとしたCh.A.ホイマン（1681－1764）[13]、妻ルイーゼに雑誌の編集や翻訳など出版活動を奨励し、女性の啓蒙に尽力したJ.Ch.ゴットシェート（1700－1766）らによって、女性の学識に肯定的な姿勢が示された。こうした論調は、1720年頃から後半にかけてドイツで500種以上を数えた『道徳週刊誌』という雑誌群でも確認できる。これは貴族の文化や生活スタイルを批判して、市民層の道徳的価値観を打ち出し、啓蒙の理念を広めたメディアであるが、そこに描かれた女性像を分析すると、18世紀半ばまで女性の学識を肯定的にみなす論調が優位を占めていることが明らかになる。[14]

ところがドロテーア・エアクスレーベンが亡くなった1760年代、女性の学識をめぐる議論に大きな変化が生じる。男女の身体的、精神的差異が強調され、将来における性別役割分担に沿った教育プログラムが策定されるようになった。この変化のうねりを起こしたのがJ.-J.ルソー（1712－1778）

の教育書『エミール』(1762) であった。

ルソーは、エミールの妻となるソフィーの教育論において、女性の自我を否定し、女性の服従を「自然の状態」とした。[15] 以下のくだりはルソーの女子教育理念が集約された表現としてよく引用される。

「……女性の教育はすべて男性に関連させて考えられなければならない。男性の気に入り、役に立ち、男性から愛され、尊敬され、男性が幼いときは育て、大きくなれば世話をやき、助言をあたえ、なぐさめ、生活を楽しく快いものにしてやる、こういうことがあらゆる時代における女性の義務であり、女性に子どものときから教えなければならないことだ。」[16]

実際、ルソーが何よりも価値をおく「自然の定め」にしたがえば、女子は将来の妻、母となるよう教育されなければならず、結婚生活や家庭生活に直接関わらない知の営みに携わることは忌まわしいとされた。

「彼女の快楽は家庭の幸福のうちにある。読者よ、わたしはあなたがた自身の決定にゆだねよう。正直に言っていただきたい。婦人が女性の仕事をし、家庭の世話をしているのを見、子どもたちの衣類に取り巻かれているのを見るのと、化粧台を机にして詩を書いているのを見、あらゆる種類の小冊子とあらゆる色彩をほどこした紙きれに取り巻かれているのを見るのと、どちらが、そのひとの部屋にはいっていくときに好感を呼び起こすことになるか。どちらが、いっそう深い尊敬の念をもってそのひとに近づいていかせることになるか。」[17]

ドイツにおける『エミール』の受容は、ドロテーアの父アウグスト・シュレーツァーが敵対視したJ.B.バゼドウや、J.H.カンペ (1746－1818) という汎愛学派の教育学者たちに負うところが大きい。彼らは、『エミール』の理念に共鳴し、自ら教育施設を建てて、その理念を実践した。上に挙げたルソーの文章に類似した表現が、彼らドイツの教育学者のペンからもほとばしり出た。近代ドイツの女子教育理念の基礎をつくったといわれるカンペの書『娘に寄せる父親からの助言』の一節をひくだけで充分であろう。

「娘よ、お前の夫となる男は、自分の妻を書物から得た知識の程度ではかるのでなく、真の女の定めをみたそうと努力しているのか、それに

よってはかるのだよ。…くつろぎの時間に夫を励まし、安らぎを与えるためには、妻は学識を食卓に供する必要はないのだ。それよりも、夫にとって快いのは、家の中がきちんと片付いてきれいなことを眺めることであって、こうして夫は妻に感謝の気持ちを抱くのだよ。」[18]

妻・母・主婦という三位一体の「女の定め」のうち、ルソーが「男性に気にいられる存在」として妻の役割を強調したならば、カンペは、食糧の貯蔵術や栄養学の知識をもち、女中をうまく使用するなど家政を取り仕切る「女性監督者」つまり賢い主婦に重点をおいたといわれる。[19] そのような違いはみられるものの、科学／学問に従事する「学識 Gelehrsamkeit」を否定し、「女の定め」を充たすための「教養 Bildung」を女性に求めた姿勢は基本的に同じであった。

その男女別の教育プログラムの形成は、比較解剖学を中心とする医学的言説に支えられていった。18世紀後半から男女の身体的差異を相対的なものと考える立場が薄れ、絶対的なものと考えられるようになると、男女は対極化した存在として捉えられていく。[20] この時期につくられた骨格図や、解剖学の教材用の蝋人形、さらには生殖器を表現する新しいターミノロジーに、当時、男性と女性の絶対的差異が強く意識化されていった過程がはっきりみてとれる。[21] やがて19世紀の近代市民社会において、男女を二分化し対極化する価値規範は、医学の権力的言説によってさらに勢いを増すことになる。

(2)「市民社会をリードする思想家たち」

ルソー・ショックによって女性の学識をめぐる考えは大転換を迎えた。「知性に性差なし」のモットーは消え失せ、知性にも理性にも性差が強調されるようになる。こうした流れは、「市民社会をリードする思想家たち die bürgerlichen Meisterdenker」に受け継がれた。[22]

哲学者I.カント（1724 - 1804）は、学識を求める女性を揶揄し、「[哲学者であった] ダシエ夫人のようにギリシア語がいっぱいつまった頭をもっている女性や、シャトレ侯爵夫人のように難解な力学の議論に首を突っ込む女性は、口髭を貯えるとよい。」[23] などと述べている。

「思想家」とはいわないまでも、市民層の社交のあり方を指南したクニッゲ男爵（1752－1796）の言も影響力があった。彼の『人間交際術』は版を重ね、20世紀まで愛読され続けた社交マナー本であるが、そこには「文芸や学識を大いに求めようとする女性」が「自然の定め」に反し、「女性のつとめ」を果たしていないと断罪されている。そういった女性に対し、男爵は「いつも体に悪寒が走るのを感じる」とさえいっている。[24] 大学やアカデミックな世界から女性が排除されるばかりでなく、男女がともに集う社交空間においても、話題が科学／学問の議論に移ると、女性は控えめにふるまうことが「礼儀」とされた。[25]

ゲッティンゲンのドロテーア・シュレーツァーは、女性の学識に対するこのような考えが前面に出された啓蒙主義後期に、博士号を獲得したのである。フリードリヒ・シラー（1759－1805）は、ドロテーアの学位取得を、「シュレーツァーが娘と行ったあさましい茶番である」と酷評している。[26]

ドロテーアと同年代で、「市民社会をリードする思想家たち」の１人、G.W.F.ヘーゲル（1770－1831）にも、女性の哲学博士を受け付けないきっぱりとした態度がみられる。ヘーゲルは、「女性も教養を積むことはできるが、高度な学問や哲学や大掛かりの芸術制作にはむきません」といい、「高度な一般性をもつ知」や学問は、「本質的に男の領分」であると断じている。[27]

博士号を取得後、ドロテーア・シュレーツァーは、当時の女性像を満たす人生にスイッチしていった。それは彼女自身の選択ばかりでなく、女子教育の「実験」を終えた父親の望むところでもあった。18世紀後半に打ち出され、19世紀の市民社会においてさまざまな次元で制度化されていったジェンダー・イデオロギーを前に、学識ある女性の社会的受け皿は見当たらなかった。

結

啓蒙主義前期を生きた医師ドロテーア・エアクスレーベンと、男女に関する「科学的」言説がさかんに形成され始める1770年に生を受けたドロテ

ーア・シュレーツァーの博士号を比較すると、《啓蒙主義のジェンダー化》が浮き彫りにされる。それは、啓蒙主義によって啓(ひら)かれていった女性の知性が、同じく啓蒙主義という名の論理によって押し潰されていったプロセスであった。

こうして、近代社会というものが科学／学問の実践や認識体系の形成に女性の立ち入りを許さない社会であったことが、改めて確認される。啓蒙期にはかられた大学の近代的改革というのも、実は「男性同盟」として中世から連綿と続く知のギルド社会を維持したにすぎない。ドイツにおいて女性が正式に博士号取得を認められるのは、20世紀に入ってからである。啓蒙主義が克服しなかったもの、克服しようとしなかったものが、科学／学問の次元においても、ジェンダーの視点から、鮮明に照らし出されるのである。

【註】

1）CERANSKI, Beate: Wunderkinder, Vermittlerinnen und ein einsamer Marsch durch die akademischen Institutionen: Zur wissenschaftlichen Aktivität von Frauen in der Aufklärung, in: Claudia Opitz/ Ulrike Weckel/ Elke Kleinau (Hg.), *Tugend, Vernunft und Gefühl*, Münster u.a. 2000, S.287-308. なお、ジェンダーの視点から18世紀の科学史を考察した以下の文献も参照。SCHIEBINGER, Londa: The Mind has No Sex? Cambridge, Mass./ London 1989（ロンダ・シービンガー『科学史から消された女性たち』小川眞里子他訳 工作舎 1992).

2）メーリアンについてはシービンガーの記述のほかに、DAVIS, Natalie Zemon: *Women on the Margins, Three Seventeenth-Century Lives*, Harvard University Press, 1995（ナタリー・Z・デーヴィス『境界を生きた女たち』長谷川まゆ帆他訳 平凡社 2001). 中野京子『情熱の女流「昆虫画家」メーリアン波乱万丈の生涯』講談社 2002も参照。

3）HASTEDT, Regina: Dorothea Erxleben, Berlin 2000 (2.Aufl.); MEIXNER, Brigitte: *Dr. Dorothea Christiana Erxleben. Erste deutsche promovierte Ärztin*, Halle 1999; BRENCKEN, Julia von: *Doktorhut und Weibermütze. Dorothea Erxleben. Die erste Ärztin Biographischer Roman*, Heilbronn 1997 (3.Aufl.); BÖHM, Heinz: *Dorothea Christiane Erxleben. Ihr Leben und Wirken, Zu ihrem 270. Geburtstag am 13. November 1985*,

Städtische Museen, Quedlinburg 1984; SCHIEBINGER: *The Mind*, p.250ff.

4）BÖHM: *Dorothea*, S.4f.

5）BÖHM: *Dorothea*, S.10.

6）治療のあり方について問うたドロテーアの博士論文はもちろんラテン語で書かれた。翌年ドロテーア自らドイツ語に訳し発表している。*Quod nimis cito ac jucunde curare saepius fiat caussa minus tutae curationis, Halle 1754. Abhandlung von der gar zu geschwinden und angenehmen, aber deswegen öfters unsichern Heilung der Krankheiten*, Halle 1755.

7）ドロテーア・シュレーツァーについては以下の文献を参照。KERN, Barbel / KERN, Horst: *Madame Doctorin Schlözer. Eine Frauenleben in den Widerspuchen der Aufklärung*, München 1988; SEIDLER, Ute: Dorothea Rodde, geborene Schlözer, in: Traudel Weber-Reich (Hg.), *"Des Kennenlernens werth" Bedeuende Frauen Göttingens*, Göttingen 1993, S.103-118; SCHIEBINGER, *The Mind*, p.257ff. 野口薫「ゲッティンゲン大学教授の令嬢たち」河合節子／野口薫／山下公子編『ドイツ女性の歩み』三修社 2001、151-168頁。

8）18世紀の大学と女性については、以下の論文が大変示唆に富む。NIEMEYER, Beatrix: Ausschluss oder Ausgrenzung? Frauen im Umkreis der Universitäten im 18. Jahrhundert, in: Elke Kleinau/ Claudia Opitz (Hg.), *Geschichte der Mädchen- und Frauenbildung*, Bd.1, Frankfurt a. M./ N.Y. 1996, S.275-294.

9）[LEPORIN, Dorothea Christine]: *Gründliche Untersuchung der Ursachen, die das weibliche Geschlecht vom Studiren abhalten. Darin deren Unerheblichkeit gezeiget...* Berlin 1742. これは実名で後に再版される。*Vernünftige Gedanken vom Studiren des schönen Geschlechts*, Frankfurt 1749.

10) FREVERT, Ute: Zwischen Traum und Trauma. Aufklärung, Geschichte und Geschlechterverhältnis, in: J. Rüsen/ E. Lämmer/ P. Glotz (Hg.), *Die Zukunft der Aufklärung*, Frankfurt a. M. 1988, S.132-147. 田邊玲子「純潔の絶対主義」荻野美穂他『制度としての＜女＞』平凡社 1990、77-136頁; 田村雲供「一八世紀後半ドイツの市民的家族・女性及び女子教育」『歴史学研究』No.565、1987、17-32頁（『近代ドイツ女性史』阿吽社 1998 所収); 拙稿「啓蒙主義がつくる男と女－近代市民社会の性規範に向けて」木村靖二編『ドイツの歴史』有斐閣 2000、95-103頁。

11) BARRE, François Poulain de la: *De l'égalité des deux sexes*, 1673（フランソワ・プーラン・ド・ラ・バール『両性平等論』古茂田宏他訳 法政大

学出版局 1997).

12) たとえば以下の言説を参照。「女は感覚においても経験においても［男と］同じく有能であるので、われわれ［男］と同様に、自然学も医学も理解することができる。」同書（邦訳書)、67頁。

13) クリストフ・アウグスト・ホイマンは現在あまり知られていない知識人だが、トマジウスの弟子で、ルター派の神学者、後にゲッティンゲン大学設立に携わり、自らも神学部の教授として教鞭をとった。彼は、1715年から26年にかけてハレで発表した著作の中で、女性の学識について語り、神は女性を男性と同様、知恵と徳を兼ね備えて創造されたとした。ドロテーア・エアクスレーベンも彼女の父も1742年に発表した著作の中でホイマンの論を引き合いにだしている。

14) BRANDES, Helga: Der Wandel des Frauenbildes in den deutschen Moralischen Wochenschriften. Vom aufgeklärten Frauenzimmer zur schönen Weiblichkeit, in: W. Frühwald, u.a. (Hg.), *Zwischen Aufklärung und Restauration. Sozialer Wandel in der deutschen Literatur (1700-1848)*, Tübingen 1989, S.49-64.

15) 代表的な邦語文献として、水田珠枝「ルソーの女性像－その現実と理想－」『思想』1978 No.649、174-189頁; 同『女性解放思想史』筑摩書房 1979、36-73頁。

16) J.-J.ルソー『エミール』今野一雄訳 岩波文庫 下巻、21頁。

17) 同書、117-118頁。

18) CAMPE, J.H.: *Väterlicher Rath für meine Tochter*, Braunschweig 1789, 1796 (5.Aufl.), Nachdruck Paderborn 1988, S.50.

19) SCHMIDT, Pia: Ein Klassiker der Mädchenerziehungstheorie: Joachim Heinrich Campes Väterlicher Rath für meine Tochter, in: H. Schmitt u.a. (Hg.), *Visionäre Lebensklugheit. Joachim Heinrich Campe in seiner Zeit (1746-1818)*, Wiesbaden 1996, S.205-214, とくにS.209.

20) HAUSEN, Karin: Die Polarisierung der "Geschlechtscharaktere". Eine Spiegelung der Dissoziation von Erwerbs-und Familienleben, in: W. Conze (Hg.), *Sozialgeschichte der Familie in der Neuzeit Europas*, Stuttgart 1976, S.363-393.

21) SCHIEBINGER: The Mind, p.191ff; LAQUEUR, Thomas: *Making Sex. Body and Gender from the Greeks to Freud*, Cambridge 1990,（トマス・ラカー『セックスの発明』高井宏子／細谷等訳 工作舎 1998); JORDANOVA, Ludmilla: *Sexual Visions. Images of Gender in Science and Medicine between the Eighteenth and Twentieth Centuries*, New York 1989（ルドミ

ラ・ジョーダノヴァ『セクシュアル・ヴィジョン』宇沢美子訳 白水社 2001).

22) FREVERT, Ute: Bürgerliche Meisterdenker und das Geschlechterverhältnis. Konzepte, Erfahrungen, Visionen an der Wende vom 18. zum 19. Jahrhundert, in: Frevert (Hg.), *Bürgerinnen und Bürger. Geschlechterverhältnisse im 19. Jahrhundert*, Göttingen 1988, S.17-48. さらに以下の文献も参照。星野純子「整備されていく<女性性>」田邊玲子編『ドイツ／女のエクリチュール』勁草書房 1994、77-136頁。

23) KANT, Immanuel: Beobachtungen über das Gefühl des Schönen und Erhabenen, 1764, in: *Kants Werke. Akademie-Textausgabe*, Berlin, Bd.2, S.205-256（イマヌエル・カント「美と崇高の感情に関する考察」川戸好武訳『カント全集』第3巻 理想社 1965、11-70頁。引用箇所 39頁).

24) KNIGGE, Adolph Freiherr: *Über den Umgang mit Menschen*, Hannover 1788, 1790 (3.Auflage), S.205（A・F・v・クニッゲ『人間交際術』笠原賢介／中直一訳 講談社学術文庫 1993).

25) WECKEL, Ulrike: Der Fieberfrost des Freiherrn. Zur Polemik gegen weibliche Gelehrsamkeit und ihre Folgen für die Geselligkeit der Geschlechter, in: Kleinau/ Opitz (Hg.), *Geschichte der Mädchen- und Frauenbildung*, Bd.1, S.360-372.

26) KERN / KERN: *Madame Doctorin*, S.126f.

27) HEGEL,G.W.F.: *Philosophie des Rechts nach der Vorlesungsnachschrift*, Hg. v. K.-H. Ilting, 1824/25（ヘーゲル『法哲学講義』長谷川宏訳 作品社 2000、引用箇所 338頁).